

- 「白神ねぎ」のブランド産地化に向けて、年間を通じた数量（ロット）の確保と大規模経営体の経営の安定化が課題。
- 普及指導センターでは、ネギの生産団地整備を希望する地区に対して推進チームを編成して、通年で安定出荷できる体制構築を生産と経営両面から支援。
- その結果、1団地で販売額が6年連続1億円突破、産地全体の販売額は平成30年→令和2年の4年で3億円増加。

具体的な成果

1 ネギ販売額等の増加

■8つのネギ生産団地が形成され、販売額等が増加

（平成29年→令和2年）

①販売額

14億円→17億円

②作付面積

138ha→160ha

③生産者数

154人→172人



2 不足する労働力を農外から確保

■農福連携や就農体験を通じて2年（R1～2）で11人の就労者、参加者を確保

■JAに無料職業紹介所を開設した他、1日農業バイトアプリを活用して季節毎に変動する所用労働力を確保

3 GAP認証取得の推進とプロモーション活動により信頼度・知名度をアップ

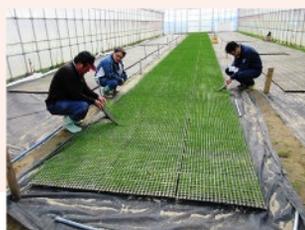
■平成30年からGAP認証に向けた研修を実施（平成30年→令和元年）

○経営体→8経営体

■地元自治体との連携して「全国ネギサミット」に参加、知名度向上に一役

4 品質向上「ベテラン生産者らとの共同育苗指導を実施

■技術力・品質面で地域全体のボトムアップが図られた



ベテラン農業者との共同育苗指導

普及指導員の活動

平成27年～

■園芸メガ団地事業を契機に、ネギの大規模生産団地の形成に向けて、JA、自治体、出先機関の農地整備部門等からなる支援チームを編成、希望地区に対する総合的な支援体制を整備

平成30年～

■「春ネギ」、「7月出荷」などで新たな作型の実証ほを設置

■GAP認証取得に向けた研修会実施

■多様な労働力の確保に向け、農福連携や1日農業バイトアプリの活用を提案

■ベテラン農業者と技術指導チームを編成、新規生産者等への技術指導の他、地域の生産者同士が技術交換しやすい環境を創出



小トンネル早期安定出荷作型の実証

普及指導員だからできたこと

・ネギ産地の自負が強い地域性を踏まえ、“ネギ”をフックとすることで、農福連携や就農体験など、新たな取組において関係機関が能動的に動くよう誘導、関係性の薄かった業界とのスムーズな連携を可能にした。

・普及組織で継承してきた農業者とのつながりが、減少傾向にある普及職員の穴を埋める新たな取組の成功につながった。

山本地区におけるネギ団地の安定生産と 販売力向上への支援

活動期間：平成30～令和3年度

1. 取組の背景

山本地区では、JAあきた白神のネギ販売額が、平成27年度に10億円を突破、平成29年度には14億2千万円に増加していたが、市場価格の面で弱い部分があり、農業所得向上に直結していない状況があった。そこで、地元（JA、自治体）が、「白神ねぎ」の全国的なブランド産地化による振興方針を打ち出し、その主な課題として、年間を通じた数量（ロット）の確保と大規模経営体の経営の安定化が求められていた。

2. 活動内容（詳細）

普及指導センターとしても、平成27年度から園芸メガ団地事業（県単）を利用して、大規模な生産団地の形成を図る方針を定め、農地整備部門と連携して基盤整備地区へネギの生産団地整備を提案し、希望地区には推進チームを編成して支援に当たった。

大規模経営体の経営安定化のボトルネックとなっていた労働力確保のため、新規学卒者の雇用就農啓発、農福連携、時短パート、1日農業バイトアプリ「daywork」など、多様な労働力の確保に努めた。

また、ブランド力及び販売力向上を図るため、ねぎ部会生産者を対象としたGAP取得に向けた研修会の実施と単収アップと品質の高位安定化の側面から地域全体のボトムアップを図る目的で、ベテラン生産者等による指導体制作りを支援した。

出荷期間拡大の対策として、品薄期の生産量拡大として、①春ネギ生産と②7月穫りの安定生産をいずれも実証ほを設置して支援した。



【左：7月穫り安定生産に向けた小トンネル早期安定出荷作型の実証、右：ベテラン生産者との育苗指導の様子】

3. 具体的な成果（詳細）

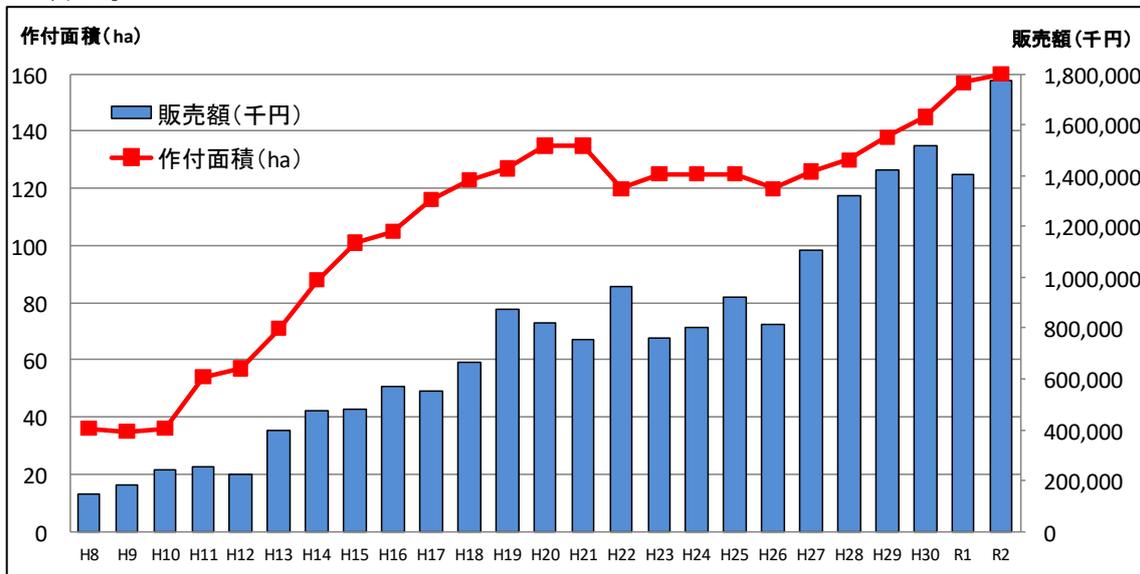
生産団地の確保については、まず4法人から成る中核的な園芸メガ団地が整備され、平成30年度までにサテライト団地を含む6団地、令和2年度までに8団地が整備され、うち6団地で販売額目標をクリアしている。なお、中核団地においては、6年連続1億円を達成した。

労働力確保では、農福連携の取組において、令和元年から10人が就労し現在も就労を継続している他、「子育て世代向けアグリツアー」を開催、参加7名のうち1名が農業に参入（R2）した。

GAP取得については、平成30年には1経営体、令和元年には7経営体がそれぞれ認証を受け「白神ねぎ」の信頼性を高めることに貢献している。

また、地元自治体を中心に関係機関合同で「全国ネギサミット」に参加、知名度アップにも努めている。

以上のとおり、生産面からプロモーションに至る総合的な支援を行ったことにより、令和2年度のJAあきた白神のネギ販売額は18億円に迫る成果を得た。



【白神ねぎの作付面積および販売額の推移（H8～R2）】

4. 農家等からの評価・コメント（O氏）

産地規模が大きくなる中、課題となってきた労働力確保や販売単価の向上について、この課題を通じて解決の糸口が見えてきており、大規模経営体の経営安定および販売単価の上昇に繋がっている。

5. 普及指導員のコメント（山本地域振興局農林部農業振興普及課 主幹 菊池英樹）

「白神ねぎ」の安定生産と販売力向上について、この活動の中で成果として現れてきていない課題もあり、長期的かつ多角的な支援が必要と考えられる。今後も活動を継続していきたい。

6. 現状・今後の展開等

一定の成果は得たものの、大規模経営体の安定経営には安定的に労働力を確保し続ける必要があり、この面ではまだ支援が必要であることから、前述の労働力確保対策の他、農業会議等と連携してJA無料職業紹介所や高校生・留学生等のインターンシップなどの活用も促すほか、経営体側としても労働条件整備を支援していく。

また、引き続き作期拡大を図るための技術指導（春ネギについては「適品種の検討」、7月穫りについては軟腐病に対する「総合的防除体系」の検討と実施を継続する。